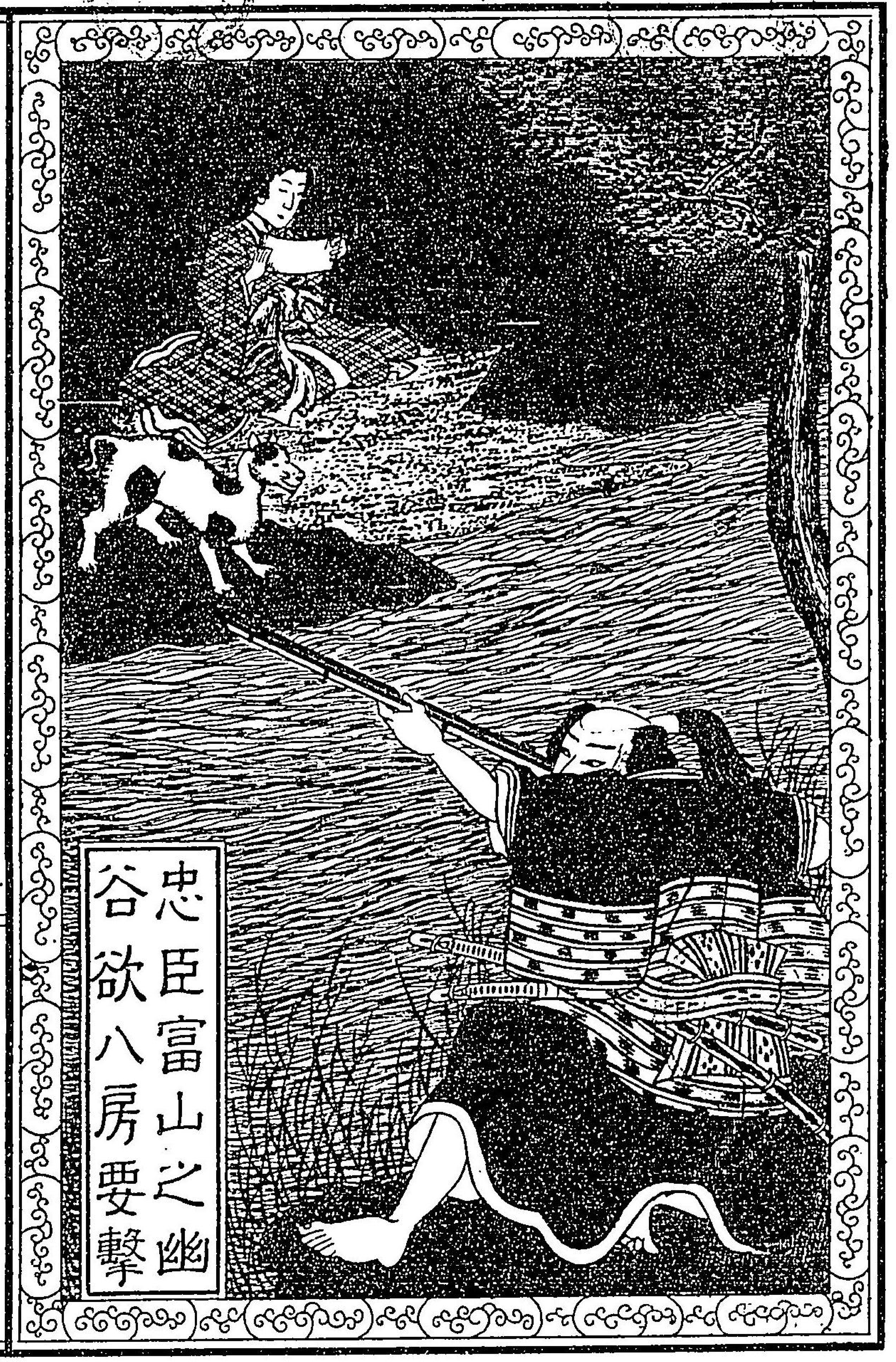
特42
837

錄本

里見八犬傳

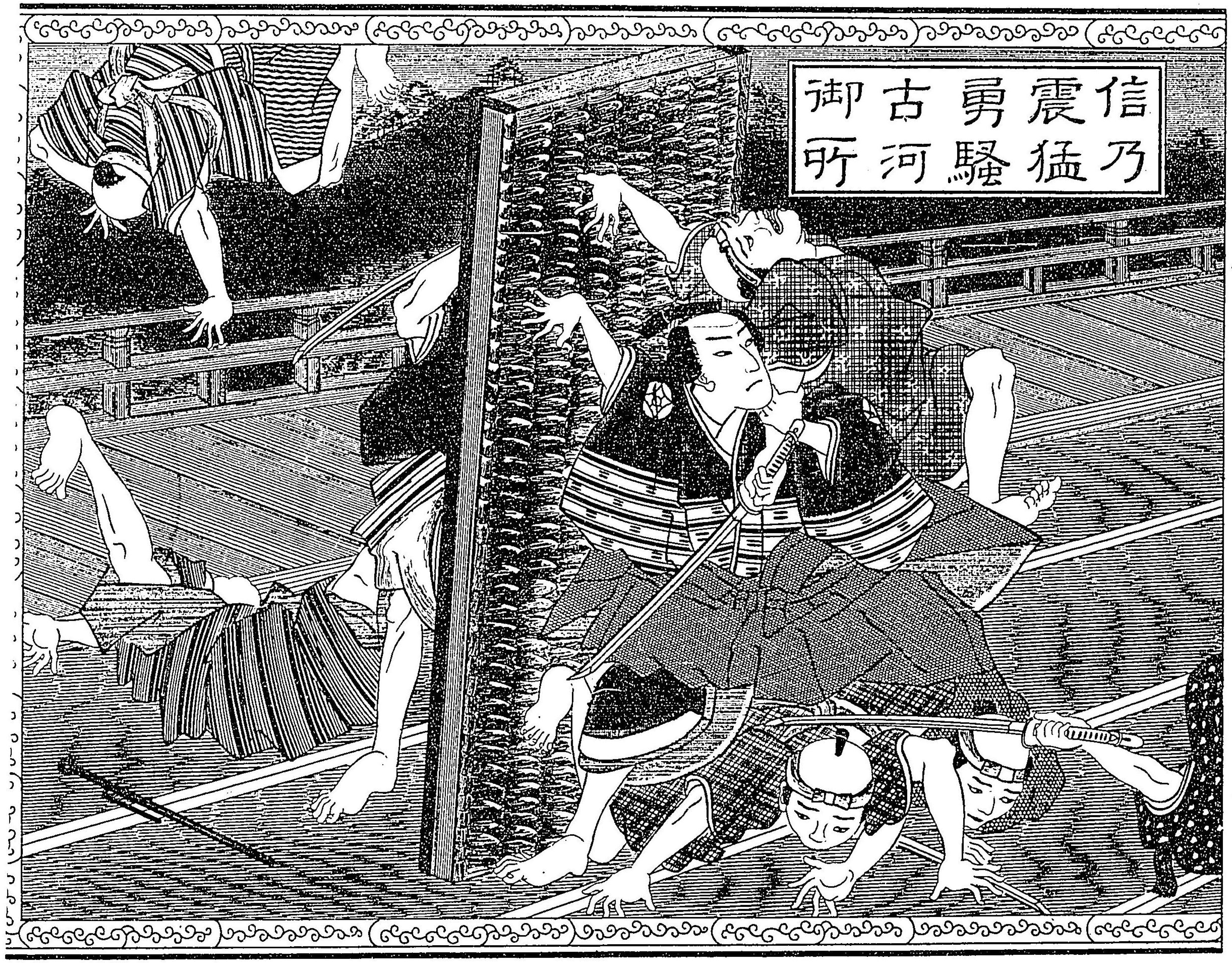
全

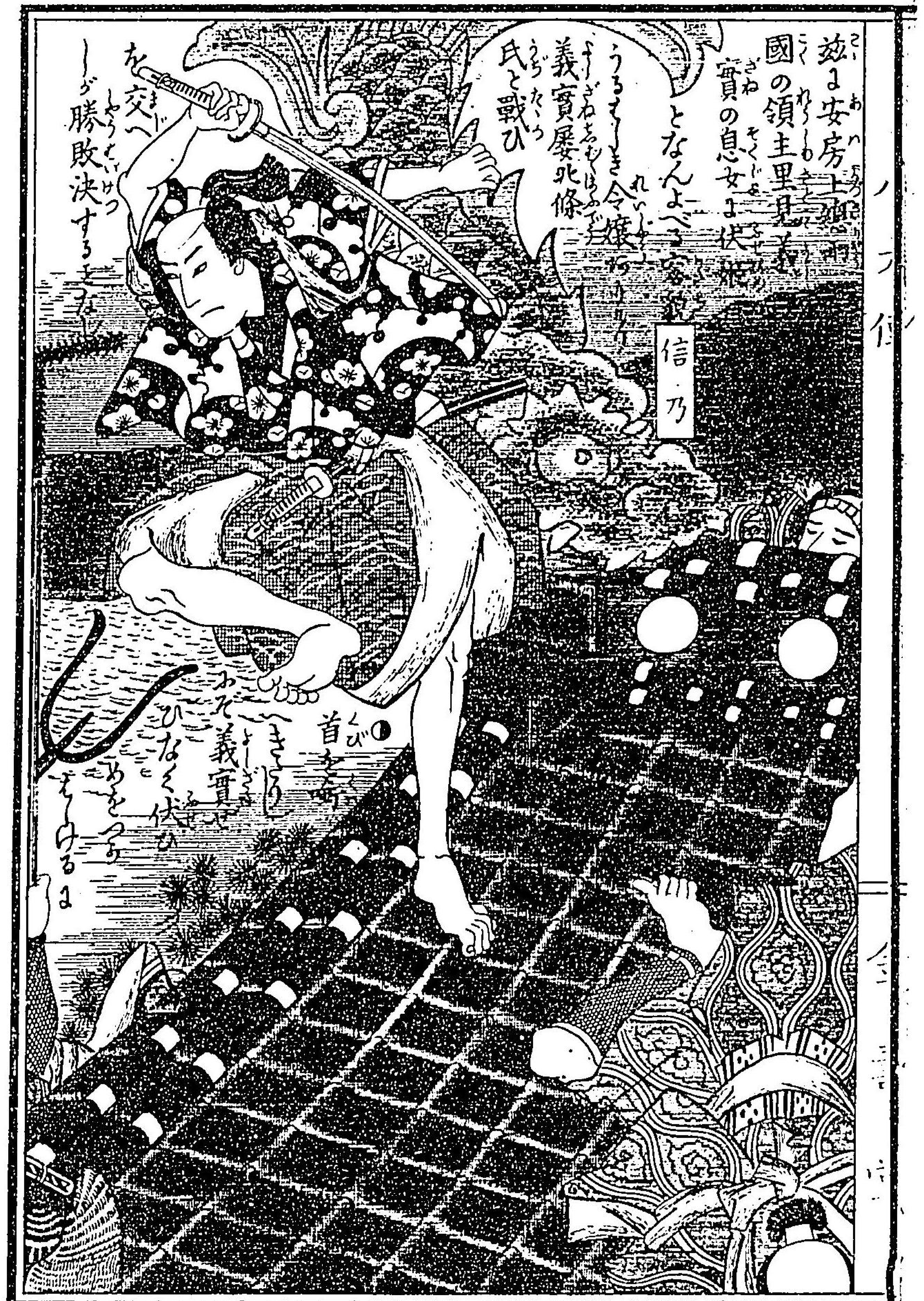
No 5440/23



道節與莊介爭雌雄

信乃
震猛
勇騒
古河
御所


信乃震猛勇騒古河御所


茲は安房上總
國の領主里見義
實の息女は伏姫
となんよべる
うるはしき令嬢
義實屡北條
氏と戰ひ
を交へ
勝敗決する
信乃
首を
きり
わそ義實
ひなく伏

又里見家は八
犬ありて義實
ね愛しける
將首を
を取て
來らば
姫を
犬は姫を負
山の山中ふ入りさり其處
を住居となしけるが
伏姫やませなく
おもひしげく
べきやうもなく
ありけれ看經
一念を込めて
ぞありしに
をりよ
し金
鞠大輔
といふ若者鉄砲
をもちその玉
まで八房は打たり犬は
あへなくいのちを
つぎ

爰にまた大塚番作の妻手束と云ふ者ある路中にて小犬をたすけ伏姫の神霊に対面して懐妊し月みちて一男子を生む是後に信乃と名乗り八犬士の一人なり然るに信乃方に村雨丸といふ名刀のありしを豊島の一族

巧みなり信乃一旦につぐ彼名刀を里見家へ献ぜんと出立しけるが蟇六夫婦がために名刀をすりかへられしをしらずして古河の御所に赴き献上せしに贋物なりしまで信乃を捕へんとなしたれば追手をつかはしけるに信乃ハ芳流閣の屋上にて追手の者を切りまくり一人の勇士と引組みて阪東川に落ち互に悶絶なせしを古那や文五兵衛に助けられける其勇士こそ犬飼現八にて

ありける又文五兵衛に一人の男子あり是をなんち八犬士の一人なる犬田小文吾なり又犬山道節ハ定正をうらんとをそのりしが太田助友のそりしどふおちいりけるの敵を受けきんでまらちなされけるが小文吾ハ義兄弟をたづねとて所々方々をめぐり山中ふて大なる野猪ふ出合ひしがたちまちこれを殺して難をまぬかれ山を下りて宿をとりしんと毒婦舟虫といへる者のたくみに災ひを

しげた

先こまをを討んとてひそかに立寄り馬加大記常武とく汝ら昔訴を讒よりてくさあさ粟飯原

石濱の城中にとらわれける日此内一舞

朝毛野といふ女の田楽の興をきとり酒宴の興をそへたるにのち朝毛野ハ城主馬加大記常武親子がちこちに酔臥したるをうかがひこよひうらみをはらさんといつの時を期をべきやとうくしもちたる利刀をひっ提げてらうかをすすみて對牛楼に常武親子網平等ハ假寐す

胤度が子犬坂毛野胤智と名のりてつひに常武親子を討取り小文吾をひきいだしくるの立出しひ八犬士の人なるを即ち

つぎへ

犬坂毛野まそぞありける此とき
等追ひ来りて取圍むを両人
斬まくりけるぞ追手の兵
思ひけん右往左
往ま散乱し
両士ハそやくも城
中を逃き出る
茲ま又犬山
道節ハ必
死の難戦
危かりしが
忽焉として火焔燃
上り道節のすがた
消失せたり是道節
行なふ火遁の術
道節

荘助
の國赤岩庚申
山ま怪異あり
ときまて赤岩一角
ハ我當國の郷士
まして間近ま
住めるま彼高
嶺の奥だま

荘助
毛野は
ところ
て舟に乗り
伊豆の
沖にて
難風
にあひ
所々の
島
々を巡
りて
浪速にかもむ
きつひに越後小
角太郎
射とめた
き手柄
なりけり
又犬田小
文吾も
毛野が
よりて石
濱の城中
をのがれ
いで

毛野

至りたるふ折
大牛を手捕
力量すぐ
却て説く犬飼現
八ハ彼怪物を射とめて赤岩
一角が魂の
銀山のほとりまで一里の水澤を傳ひて
凡四五里
来りける柴の扉のうち
年壯き男の世を
端近
經机をまへ
大村角
大記

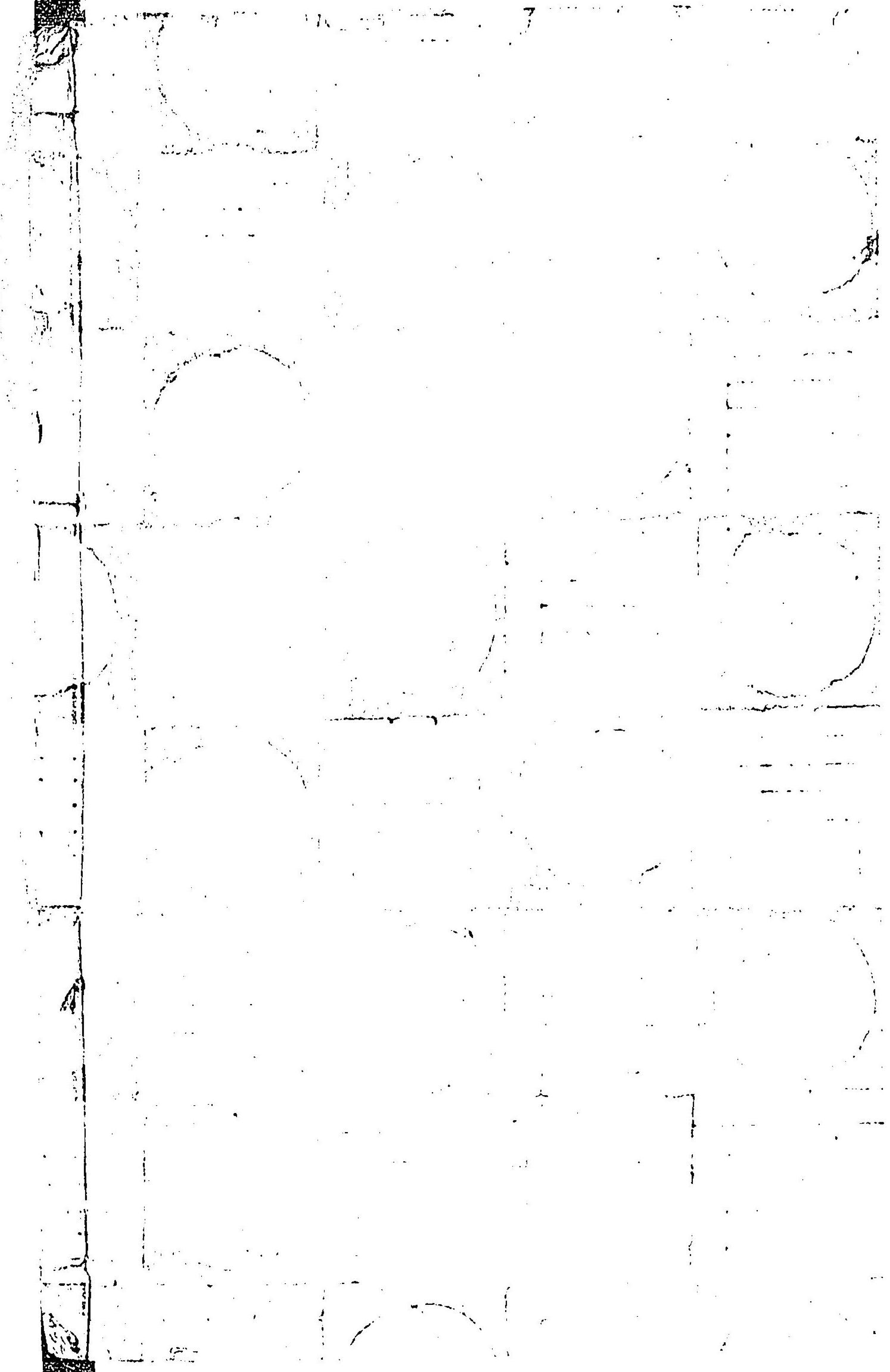
とはすてをたてりし
今はうき世に頼なしとや思ひけん
涙を斂めて身を起し裳引あげ
すごすごと立行くさま
ともなくまなこに見て
ゑ現八心に思ふやう
信乃
用ありて御出になりしぞ
以て承知せり
貴君は
所
しも心もなとさき引まくり
角太郎は慇懃に容をつくろひて
拙者は大村角太郎礼儀と申者にて候が
既に貴客の高名は屡
名のらきを

今彼女の言をきくにいよいよ思ひ切たる心底
驚き憐みて
ゆんとる
角太郎は稍く勤行終りて見れば
声高く犬飼氏
現八
遁世のねがひあり
恩愛の情を脱し雅俗のまじはりを絶つものから
浮屠氏の境界に真如の月
運
しくなりて

をなじく維摩の室に坐せんとも貴客必ず
高論あらん
妙珍

我昨夜の夢
に何處
ともなく大なる犬
七頭その中に隱まて見
えぬありしが某ふかく心に
して手を拍ちてこまをよぶ
よぶほどに我身もたちま
ち犬になりぬとおもへば忽
ち夢さめしが今にて
おもへばなどゆゑなしぞ
親兵エ
姫名を
に現へ

版権所有

明治二十三年八月廿九日印刷
仝　年九月　三日出版

編輯印刷兼発行者　浅草区南元町十五番地　牧金之助